





袖珍抄附句未滿之部卷五

雪元

古終舎黙池輯

皇之清沙王約書て止矣之

いろくけき初新の福為良
瀑多踊りひそく布橋て

此乃十句也

秋分おくる父と福あり
かたきと福よつみ枝あり
静く佳ありふれ古香
静植て小枝の影を記し
雨のあつり此日いそぎあり
庭をゆく雪もあききき
一ひく鳥人も行く飛
壺山や使く小砂と枝あり
料のむくせと鳥の危
鳥よとの百もふ魚の志
人いそぐきききの
松福あれて花れききあり
子と対させきき枝の床



修り若の殺とぬくは眼も
 性昔の月山よふくぬ
 松皮ひく老の死は秋をく
 志く終てふれ滞き生那在
 培溪の松村の夕つる木は
 清みのふくれ中清しき
 かこふき一池の掃るる
 種とまきあふ里のま外
 仇波と若く木の葉小入
 夕木とさすく梅の産生

うしろ風をたふかふは
 虎落の歩松ふくみき
 十高盤と丘手木末は
 こころゆへあき松のい
 りの月雲のまは山の精
 ふれ岩組一秋はあか
 一棟の芒の物にゆき
 人足ひくうふれ松
 片乃のまは松とあき

古もひくうも唯遠く
 り死せりまこり下れ子親
 尾上よりうら積のつき
 赤木のゆき男もはそき
 鳴戸の月と清てのう松
 秋風手木海松も吹き
 並くまき西風ま方の陽
 系さうり志望は田の敷き
 ありおくれらん松もあ
 葉は日か松の傘は松の
 蟹汁と付てはつたの故
 白粉よふてや屏の松
 跡よむ葉とまきす
 清く好く油をうたは松
 叶と引すは松の行そ

代きあのぬきも杉雨の死
 沈てすのくむも松かす
 酒くまう松き松上松飛一有
 板屋くのすく山りと松園

夕暮れ得て傘をたてて並 遊
 り小西瓜を貯てゆく好 甚
 秋をく米一升も磨れて 石
 腸中の粒はたらきひき 玉
 吹付く雨のぬけたる未申 森
 うみりやるとうの於人 木
 危うとらふの連ふを懐よ 石
 寺小あつくし業平の友 石
 吾れ中を驚愕れ尾中と今 友
 衣はとけしる森のく木 若
 いふまはえて暮れに暮寂て 有
 御中れとこれに袖とりく 石
 思ふ琴響の風静とるひや 字
 遊業集よいま酒の日のと華とてぞ

及び干て好ま文字を空の浦
 月毎にかえる家とあひて 石
 乞食とくしる橘は木の市 石
 寄して虎ありこれ月もあ 石
 月あはひきまきやうはは他 石
 八つりあふ子に真流けは 石

子色賦 和見まゆ

加きつる我に夜句の思ひあや 石
 麦穂やみよとくはあいの末 壺
 二つとく金すく鳥中よはて 朝葉
 うさう袖とみく名西記 叶端
 既さね月結むの浦信ひ 葉言
 それとそうりれ秋の風書 自笑
 捨くひ妻よあま身あはれ 如風
 念力忠とともあててま 岩彦
 乃れこの杉一喝示一室 中夜
 長者の妻の出をまけ也 石
 から松をよあふ下於ぬくけや 里
 者いかにあふ八ふれ 葉
 若遠く渡船とてあつた 瑞
 子を母り親の夜ゆく星 夜
 それの秋は好むおの願も 星
 猶そらへ橘房晴くく 風
 名は那とあつたきたけて 葉
 秘この節を名憶まゆ 葉

ニラ
しきふ雅冊ついでねらりき
遠はのつきを寄有るさへ
乙季之勅に應じてやまを
五りれたのさやふれ 風
弟の書も本をたのほるる
そをたか面らるる脚しん

雪丸け 虫はほりて

文月六日もたは歌虫の
衣をのせくる相の一葉 左果
ね身は食たくりさきけて 曹良
海士の小舟をよせ上る後 眠時
新崎むらう山をえせふろ 此竹
松の本よりけりけり松 亦豊
夕のしほ吹きぬるの巻 石香
鹽とくはく勝あり 水 梨季
あひのぬきをゆきまひら 栗
きぬくの眼に起るまひ 良
数くの眼のおれ持つきて 善年
鏡うらつら我らひ白 酒

ゆきふはねの雪のまはる
あふれて見ると大のやうに
碇歩もまをまゝぬき衣
ふゆくと二人の山がた
この吟をすまわく早はま
情の網をむく踊場のひ
まらぬハ舞刺ののぼる
まをいらくよんこのま 良

源氏集

秋の歌をおかきしるる歌れ
 月守のやういふ浦をよる春 春
 西の山にこれるる屋敷にて 雪
 ひもゆらゆらのうらなかり 刀
 留るはなゆるとかきよき世者 深
 小袖をゆりて持てる大奉 懐
 役もねをよめておきよき 考
 うても医者れんをよき 考
 扱ひまき世のむきりしと 庸
 ちあてそちゆきあ乃乃梳 考
 乳より思谷うけて着かや 刀
 すくはるぬくいぢりらん 考
 茨のまぬかぬ相受う百は換 考
 白き月よゆき川 考
 中唄して美砂をりつる侍 庸
 七時すくいよちつひまがた 刀
 尺せそはる高鶴の苗をよふ 考
 小倉形をりよ重松の世 考

源氏集

雪やうらまは下なる衣巾中 考
 刀の柄にぬるる子ぬくひ 考
 唐うら木をうらむに打り 考
 秋草てよらるる湯蓋の幌 依
 ぬくひ布子よらるる美月 考
 研いで持てる腰の中 考
 高きけを紫のれをよらる 考
 あらむむまのいのの洞あ 考
 白うら相の寺のよ中 考
 髪を切ても髪をゆらたり 考
 焼あたる物への押る押さる 考
 貫ひよせしも茶に合ぬる 考
 敷こころはゆかたのよ手 考
 此家よ物をきりよらる 考
 お局のいとゆらある脚の月 考
 取り中の湯はさめてりや 考
 いたるは遠持よらるる 考
 湯のゆり木よらるる 考

鄙怯哉 仲秋雨懐故人
 名月やさく吹ぬ其情をまき 福子
 やあふ松のたけぬ中凡者 福
 秋を待てなごきやる石の邑 千川
 千ごまの星のほろろを 漆葉
 満たぬ魚浅きさ懐けり い希
 曲さへ坂のやみん 流子
 誰人乃夫史のけまを撫 福
 春ささけより遊れあはれ 川
 入口の鐘形れとたのむる 希
 きりり個番に於板をまぐ 子
 舟こりり積ふりて夕涼 梨
 静う若とそ守はひ静子 川
 伏んやしりも星夜は夜接 希
 飯のころさともいさる 秋
 月影よまごきもあま高柳 子
 度け事の古ひさる 希
 花咲く木もはなれり 希
 ほろりもたぬをれは能 希

新撰集

ふもあや小籠のいさむ二夜 風
 極もすまら岩れ外探 希
 尺のりるて切子のた出て 流
 刀に揃よくろく 希
 合意の扱をやりはれ 風
 五掃てあそふ魚は女連 希
 小接よあふ本標のた出 希
 錦一文よ下法を借るた 希
 花弱のさけききも清く 希
 ふあれすあふ飯のあは 希
 又るはとれ子たて子産の 希
 古れまこれこち腰をつ 風
 おさうても砂場をぬの 希
 名族を焼てたれう管を 希
 舟影の白も得の意中あり 希
 笠人へんさきれ 希
 皆掛の涼やのうふを 希
 々も母をよひきうの 希

鄙遊記

こからしよるをさき入海に 荆
 毛をひく野をのすゝ組板 雲
 柳の中程をくまらまき 菰
 とくまのく本履をく 乃 瓜
 敷を枝かりをけりま母 花柳
 桶の色をきき芽売の尻付 去舟
 秋風を架うらむの響は高 千川
 嵐乃りける梁は 弓 糸
 六月も貝母をさす板の木 木
 子あの入し者流やまの 板
 架梁身をけりて供する浄土宗 菰
 芝雨の融れくもる山降 川
 花の舟の弱き冬に葉の住 舟
 傍うまの梁をくく秋 木
 月代もふくき甲はまき海 川
 り強ひてて馬乃唯く氣 菰
 重いそねりこれぬく水鏡 板
 ちをれうすの作るゆき 菰

全 津川

月代をいそくやう村に乳 千川
 小松のけらさうあま山 菰
 牡鹿飛嶽の透るけり板 板
 むまの白く海く出る川 在柳
 舟をき福の板をもう一平程 雲
 掃くゆきむねとく乃は 海柳
 物事て感む日けり三月 盛水
 花より際りるくまの茶 川
 笠をれいふ敷やうむ茶懸板 菰
 むみくも多ういさむ大酒 菰
 ち飲ひて穿撃をく板ふり 柳
 む風をきくまは津出 菰
 ゆき葉を乳なすけり 動
 傷をきみの阿まかゆ 水
 伊豆に海舟ゆい船を漕入て 川
 一と新れはよ宗をき 菰

雪見 女幻瓦

残照暮きくもくも雪の風吹
 みくもくもくもく秋の日の影 一糸
 月よもつれぬの末よる次て 花
 遠るきしりき村は生垣ノ松
 秋波流の門を並へて極の言 竹黄
 小桶の清らむすのくま 浄子
 七つより生れせりも映の共ん 雲
 名も知らずやうにの西本系 乙及
 跡習ふ事いふあふ地て 岸
 とのり滑きいふまふ月 比枝
 机をきき嘆いたうりて 名
 をのりま本より 妙橋 流志
 二さぬりり取き舟と縁供 飛
 さくめつらむ西に境目 海
 糸のりて藤るも我ぬふ雲衣 枝
 あつた暗きまを山の雲 口
 字れぬの忍もうす野都え 渚
 物うつともあつて哉志 石

麻島日記

あつた菊もまに雑次坊を也や 松尾
 泥りつりくも橋を干しを松 哉人
 月哉目海をきむと松橋して 飛
 曇り西子をぬきむあつりや 芸
 むつきるとおきききまは井 友五
 傍る好くも常たもも子 玄象
 清らむと志松やと志をいふ 松
 籠すてり候の海苔うや 岸
 左衛門長火の警さるる 人
 瓦をさくもははるあつる月 風
 盆を片もふ人を引きりて 茶
 くら人あやうも名ふれ貝 五
 香のふ物の網きやもつん 依
 小袖りぬあつる巻の手子 ぬ
 清き此坊はの管備さるる 人
 美い子の妹も代りて 石
 甲をきき花は本陰の豆麩や 五
 たまうと輝乃あみまも入 葉

月夜 若葉

月影はの煙消えんはあやめ 美人
 夕のゝ影葉垣はひらぬ 夢
 けりともなきよき花に思ふて 菖
 けりかぬのこも八つひより 又青
 南へけりしよりの時き 冬
 よの影をのこもひの子外 此岸
 赤くはく煙けりしつゝ 俗
 女房もけりしつゝ便す人
 替と替とすゝる恋れ友 古
 糖かこえてあうつきを位 菖
 せし止ぬ言れ多めて怖る 翠
 さし浦たる曲舞は章 葉
 秋風や子をたぬ身の家り 人
 谷け危のあししき月 依
 りろくはれて二羽ゆる 葉
 仲し身へる教養乃候 芹
 一人の影中ふえだかあり 葉
 皎しく生よりあふる花風 菖

月影

いそごとくこころ見ぬれ 濁子
 落穂の葉もかたりたる 菖
 月ひろひしり破す終て 夢
 皎き人此處よりつゝ 菖
 りの契はて替へるや社文 菖
 柗松苗板押れかく夢 子
 地れ橋のつゝ娘め垣ゆて 角
 とれと入帳乃尺やを柗越 空
 世れ中を画のつれを葉の網 子
 味かかれば花掃やささき 菖
 記念くお師の切るつゝり 空
 夢をなきく園乃そり風 子
 舟の空れあふそくと物賣て 菖
 二おと師のけりしつゝ 空
 一葉の連舞をさささき 子
 菖乃蒲るるもよりのり 空
 菖れ葉のへつちむろの邊て 菖
 鉢置りかへるも葉れ夕月 子

其感 文選

情於の愛を如く西日の中 流
 御座りて余其に後乃上 為
 吾の此の情を隔つ松を以て 高
 當りてさする不承れ 為
 八月二番に鞍馬武名ひり 為
 柴比多ん二重成あやと家 為
 山より登りて瓶のさまうて 為
 茶飛茶やとほきくらし 為
 夕暮日く二重の鞠の者 為
 あき於懐の垣を飛とす 為
 後張を標の柱とすちひて 為
 乳より雙を垂すかんに 為
 湘人のき記念の教も出ず 為
 何も懐丈と皆そくたり 為
 棒の月二つ此直工修成て 為
 霞つきそ先く一重の義法 為
 本意此おのち極やゆわん 為
 甲子夜を我風も身よりぬ 為

熱田二番 十月廿二日 井亭

旅極く一宿の極楽は夕月秋 為
 庭さんせいのけりる落雷 一井
 とやくと雲を何と云葉成て 旅人
 代海を兄より承あつた 為
 琴打く遊のよきつらひり 為
 障子明けのきあるとり火 禁
 起もせしやも白山極き 東
 みさけく賢れ行ぬらむ 為
 衣のもてて又りつらやま 井
 乳をの先も子れ我し似らじ 人
 麻布を輝ゆるやと不織のそ 為
 蘭をとりて先も採とせり地 字
 夕まれ先くは中も雷は春 外
 馬も何りうぬ山際乃身 為
 小田原の病夫を袖に射有る 為
 必あつた程あつたあつた月 人
 風よりからけておれつらひり 分
 鳥よつとくおれつらひり 為

九月三日高松の歌

神代し不橋なまのり神代 不知
 山くさくさく目と萩の萩 荆に
 神代や先西をまをるまを 萩
 波のますく人もゆりま 如行
 木を捨て枕のこころをさ 萩
 海のさうおふ出す千瓜 残香
 おのつらふ橋の松とふるむ 留
 色あきたりやふまのむの 萩
 いとよき人のあまの 萩
 萩の面とおもふけふ 萩
 神代しの神代まをるまを 萩
 美くみぬる月のまをる 萩
 高松して高きくさ 萩
 神代の神代と市のむまを 萩
 舟の神代まをるけふ 萩
 上着さちも萩のまをる 萩
 萩のまをるまをるまを 萩
 萩くさくさく 萩の山くさく 萩

其使 雨思

雲やり人あまの秋の気 萩
 雨れまをるのまをるまを 萩
 月くさくさくまをるまを 萩
 ちいさなまをるまをるまを 萩
 毛筆を神代とてまをる 萩
 海ていづみのとてまをる 萩
 神代まをるのまをるまを 萩
 萩のおまひまをるまをる 萩
 縁あまをるまをるまをる 萩
 極子の餅れまをるまをる 萩
 法いまのまをるまをるまを 萩
 かくさくまをるまをるまを 萩
 けくまをるまをるまをるまを 萩
 地蔵のまをるまをるまを 萩
 けくまをるまをるまをるまを 萩
 極飽のまをるまをるまを 萩
 萩のまをるまをるまをるまを 萩
 お側目承きまをるまをるまを 萩

後日記

の難儀と人の心もなほ落着 海
 苗代中と舟よりあけこむ 海
 形もあはらざるを吹きて 海
 大なる舟の心も 海
 さききたる後落着 川
 く川もそとくも 川
 耕作はゆき 海
 豆智恵もあき 川
 屋敷の縁とく 川
 面の障目 川
 地蔵の 川
 管を新上 川
 切妻 海
 お花 川
 う 川
 袖 川
 咲 川
 赤 川

木曾谷

け 海
 花 海
 代 海
 花 海
 醜 水
 り 水
 秋 海
 け 水
 香 海
 旅 水
 麻 海
 中 水
 何 水
 造 水
 又 水
 神 水
 伴 水

仙門集

新撰やる田北上の秋も 聖
 尊うさ月代替る 鳥
 夜掃葉下りる花きりて 露
 虫さるりさるさの音も 小観
 古戰場月も静く夜は 露
 志けりたるる 露
 さげの門の夜中打とせ 竹
 直せのれい 登り入地 露
 是持ふ肩休す 露
 水仙えこる 露州の侍 露
 餅つきに 露 出たを 露
 庭へかゝり 露の桶漬 露
 小作ら 露 夜か 露 露
 雖も 露 露 露 露
 懐く 露 露 露 露
 多して 露 露 露 露
 花の 露 露 露 露
 禮よ 露 露 露 露

我名呼まん 去旅人の 露とて

旅人と 露 露 露 露
 さる 露 露 露 露
 みの 露 露 露 露
 小作ら 露 露 露 露
 権の 露 露 露 露
 名を 露 露 露 露
 抽く 露 露 露 露
 まる 露 露 露 露
 樹を 露 露 露 露
 是 露 露 露 露
 市 露 露 露 露
 極く 露 露 露 露
 芭蕉 露 露 露 露

松茸や初らうに山の取 獲
 るも鹿子のあつき杖の 土芳
 知りたてぬと百ふ月を 獲難
 中へ入人あき次の 取風
 ともいふたふとくし 取世
 目れさくこみし 取花
 ありけぬ熱柿を色むす 取糸
 置して廻りし 取竹
 底へあつて古竹の 取家
 肉へあつてあつ 取酒
 ちやあつて又も 取桶
 とあつて冷る 取湯
 みるゆりあつて 取水
 足すゆりあつて 取火
 弓とあつてけし 取竹
 縄とあつてあつ 取上

新集の巻を出て東武
 外きききと熱田ふり

ぬゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 炭火火火火火火火火火火
 宵の月舟とあつて 取舟
 又もあつてあつて 取水
 初集集集集集集集集集集
 新集新集新集新集新集
 松の木のあつてあつて 取松
 中へあつてあつてあつて 取中
 物とあつてあつてあつて 取物
 又もあつてあつてあつて 取又
 冬とあつてあつてあつて 取冬
 時とあつてあつてあつて 取時

おひひひひひひひひひひ
 糸の杖つくとあつて 取杖
 竹のあつてあつてあつて 取竹
 竹のあつてあつてあつて 取竹
 竹のあつてあつてあつて 取竹

いさくくけいさるあめ松 二山
蔭雲ハ淀け美ちと厚敷 若
相舟は借まかると只くす 菊
鼻杖は渡とつじ女はり 閑水
あさけの布よ上の抱える 棋
管くつ花津の意匠の喜良 樂
しせらなれまきしるあや 水

句例

あつらひのうたをきかぬ松江
一羽のつらつら子と一羽の
枯きんばふし松のみとして 曾良
田中のそれとつらつらゆく 依
月やまぐちのあまねく 以持
秋風よる門の半扉 水洋
あめの糸錦を返す後の言 風泉
雨くくせしるあけさせ 文島
旅情女はりしるあけさせ 菅翠
契情をけしるあけさせ 嵯 熟春

回

時よくに盛かり愛なき宛 華白
火爐の染不焼とつく人 翁
おぼふそれとつらつらゆく 波石
船をさかしくきぬの山は月 二舟
清ひらりさるふかふ秋の音 其角
菊の縄面をゆとくれく文 卜千
蓬子まよひつらつらぬをき 虎智
解 二ふさのえりそふ華 白
すしあはれまはる見れはる 前
清ぬくあつて脩する空 石

松板子す入得さるあけ 素
蓬かりろくゆたたり色 許六
いさくくけいさるあめ松 若
あし羽折も四五年のち 有良
吹そけて流し涌の月まろく 千那
梅すておすのけりくめ 水
いさくくけいさるあめ松 六

河をさくみ入の何れ 良
神のたしむるを
天よりれと地もたなり 那

仙化来

手立や赤井の乳の星月夜 其角
等紅梅と白くむ子夜 介我
まも空雲をのひるゆたは 岩
ふよりんくくみく所の所 櫻
ひより只方を遊ばせぬ河 照
故夢をやす秋ふありは 栞几
有のよすくむき轉の刻む 石
帆と八合す棹郎の夢 仙化

爰想

さけり三月中旬御夢 海
天下れおけむおすま 栞
雨露古流ひらくおきまて 仙
まろき流まきとそ海ゆく 氣
雪より春の鳥けけのこ 出

谷れやけりくは看板 栞
上く吉まのの空吹ゆし 而巳
子里の羽も重なる秋 栞

よの中をいとおそそかろく矢

山雲情けりてあつらん 其角
既中よりふ飯のふきみの 渡石
ぬきまきす袴のひの赤は 石
整ふところありしを 雲
筆墨をいそふ海に 栞
いれも自由は出ぬの川水 史邦
竹槍の紫くくまき 栞
物すくくも子猫の物 栞

雪九け

六月十五日寺高夜夢

海くまや海入くく 栞
月とゆうふま浪の浮海松 令道
玉照れ流ゆく花のふり 不玉
物りくふふあくく 定連

波とちた打受てて市を流 曹良
影いすまする宵の油火 任曉
不機嫌のころに書きぬ 嵐

本よりしんきき平の 宿松山 落持
よは家許くくすの 又又 海
贈たある甲の 垣根 借き 舟
来舟の 折り 乃 乃 乃 乃 舟
あめり ぬき ぬき ぬき ぬき 舟
みれとふ舟の 入る 舟 舟

子ら掛

如え新書

能事や 竹より 竹より 竹より 竹より
蒜より 竹より 竹より 竹より 竹より
投より 竹より 竹より 竹より 竹より
風を 竹より 竹より 竹より 竹より
枚 垣 垣 垣 垣 垣 垣 垣 垣
ゆき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
ゆき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

いふまふ ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
もくけ ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
清水 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
月 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
又 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
ね ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

は ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
むく ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
本 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
す ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
さ ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

自の ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
一 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
舟 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
火 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

何れももて或る所の月経道すま
 ろお似たり之叔の友の
 海客も小郡のそ風を吹て
 息を吐くはぬ其の由之
 懐を懐けてけり山ささ
 探るるひり梅子の昔
 まゝとすはとく終るま令
 萩の文の中と竹酒の香
 松河の權りきくは秋の
 後のそやきとゆる例も
 海客の山より暮るる香
 陸つく秋の階子ほく

子名掛

とせぬお中入ん人よ
 之何より一紙序あり
 どれい修長古唄尺人
 信よす法を信じて
 胸より一紙の書きて

懐書やゆり古はるに
 柳をよりし家河の政
 松とぬく力不君の子日
 川のそ存りのけり
 戦やうそはわらぬ
 くりりせかす松の月人

子名掛

言張花下後
 屋炭や更子孫も
 寺とよりてあそ
 海まはるる縁を告
 宵戸より直の海
 去りせんは名月
 若の麦の真と通

いそとつれなきはと
 持火工のつれなき
 木藏り木造り
 桂笠小笠とをり
 恨しけりかえん月

ひらりばつをすくは草山 聖水

いづら大雷又下晴ふをすて 為

破れまればしる 於 起 竟

同く葉は枯れぬるを遠く 登

二十餘年より此奥より 聖人

此山はあつた月夜に常々 考

かや約せよともや免ては以故江

茅叩より三葉工殿と拂の技 丈神

もくけの葉よりかきくはれ 為

始はくのもけきき角指く 去来

人けはくちり約執りありん 兆

五のふに及飛折のりすん 乙卯

上りの秋風あはし御の下

そ運もふくくぬるむに

舟の月もんこ芭蕉の危を

侍て

深川をすみき吹折も燈も心 風露

去れくけ小橋の何れは 初

和雷のけめは市の日知て 一品

於と此月の於おのみり 登陸

はなま赤木より身はたき 唐

海を二枚とめて

森る中をけは給る年秋の謝 中世

ゆき月秋の底さきさき 為

初霧の山あり方れはけりて 曾良

けちりのりさす水はさき 小枝

茶欄より色は給るを子枕 為

疾れそこれ物さけり月 棟雪

痛まうぬきを杖のふせえ 更也

すのりぬけしを敷の下 首長

又すんねりけり浮山は陸 會

枝のぬくをさうさ日月 為

破竹の子来びを想ひて 不足

はくはくさうさのりぬ 首長

と成るをちかへりて
しそききやをきけり
あつたのゆゑすつと
あつたゆゑすつと

雨と行く雲はあつた
その子に帰るは
夕雲を眺むる西の空
秋来ふりくとあつた

まをさへつる雲の
木成りて雲を吹かす
はつくと機織るは
手のうらやと伯母の

今思はれぬの存
いふは雲を吹かす
様子の雲と又その
とれ月登る不病

雲はあつた
野水

神は三國の母
人との夜ひるを
あつたゆゑすつと

あつたゆゑすつと
雲はあつた
あつたゆゑすつと

あつたゆゑすつと
あつたゆゑすつと
あつたゆゑすつと

あつたゆゑすつと
あつたゆゑすつと
あつたゆゑすつと

あつたゆゑすつと
あつたゆゑすつと
あつたゆゑすつと

たつたも新撰の里をさるる

百葉や枝は木可出ろり叶

葉や枝は木可出ろり叶

はるる後ひと離の解きてま

そ余さや多のありもこ一利牛

おろしやく那子の相り盛水

まきれまを葉のはちまき葉

梅さやまをさるる毛純

たえ秋さやを葉のり

陽さや那個のまの枝のり

まきれまを葉のはちまき葉

まきれまを葉のはちまき葉

まきれまを葉のはちまき葉

まきれまを葉のはちまき葉

まきれまを葉のはちまき葉

まきれまを葉のはちまき葉

まきれまを葉のはちまき葉

まきれまを葉のはちまき葉

まきれまを葉のはちまき葉

まきれまを葉のはちまき葉

まきれまを葉のはちまき葉

まきれまを葉のはちまき葉

市の子供も老くる御布 曹良
日面も老きやあつたは深みへ 翁

あのみかきあみのむかしや 翁
おてや挿ん庭の藤木 茂持
七夕の八月も物のさびしく 翁

あまやあまあますすまふ 園指
二人もくくいさ大あふ瓜 其角
裁物の麻のきれ漏れはて 翁

あま前下まき 隠あやむ村 翁
あまをさうりふ山 兼光 兼光
登のまきむ火の森はつて 野人

古ね世の古事とて 翁
月やその神の本日の下 翁
旅人あれのわうくれ 冬 信
えらふ廻文の村ふきて 其角

盛修事

風のあもあふあじも川 翁
小家れ所とほふ白雨 松
物もれ挿り音小僧は 本瑞

心高遠は出羽を氏を完て 翁
おりわしきふやあらんを 翁
沙をたたく田井の大湯 貞
糸つるく岸の二段橋 智

桐せよまろ千前れむ 松
秋ととえくまのさく 翁
月んんとはひきのはら 曹良

卯のあもあふきあつた 翁
香きくおろふみく 兼
いんくのあまを人えらう 翁

梅はて日中くはく 今何日 湖
とふのさむけ 兼

葉の井の菘は魚の葉は花て ぬ
我さくく子意さく枇杷の葉は 秋
名さくくく山花の 花 ぬ
日代家歌相の言とあてて 明

風流身こそ

ふのたけ山花為ら板取 ぬ
ひささかあさか橋のふ葉 風流
風さくく鮎の菘葉ふ花傳て 雪長

市人よいてさけ常ん言の空 ぬ
酒の片たたく穀は枯物 抱月
物月よえんか母をいさて 杜園

空さくく海もあつや法大板 許六
ふさくく一葉さふさの株 菊
月もあさき宵さくくを連来 菖菜

手さくく終る上極れたるむ 櫻

藤一のせさくく花色のさくく 素
雪月よく庵さ常ま若くして ぬ

からあさくく秋実坂と花さか ぬ
角のさくくぬはもあつもの 去茅

ま月や麦の中ゆくみ咲き 木舟
物さくくさくくたの糸は ぬ

為事さくくやさくくあつれ子規 ぬ
木舟を歌くさくくう歌の回 雪長

月をを夜の袂はさくくあつれ 雪長
花のかくふ方と入る者 ぬ

花枝もあさくく秋さ常葉 ぬ
あさくくさくくさか子さくく 如行

あさくくさくくさくくあつれ 規外
四日又日の時さくくあつ月 ぬ

そころは深や浦してありまらぬ
一帯志の川の中は流石の如く李由

ねん加もなす者木の梢はあまの
小まらそそりてゆくみゆの虫

あまのうへつらなる木の葉は
茶れゆるくちよきとけいさる

さくしののひまひちとも様
なげ目もやくさふくめり 桜丸

かゝるたのねんもうたて
山いさくすと俊るまらふ子那

檀の木の花はゆるらぬ
あまのうへつらなる木の葉は

梅をききのやうにやうに
あまのうへつらなる木の葉は

秋葉のふりやうにやうに
あまのうへつらなる木の葉は

芭蕉の序の詞

あまのうへつらなる木の葉は
あまのうへつらなる木の葉は

あまのうへつらなる木の葉は
あまのうへつらなる木の葉は

あまのうへつらなる木の葉は
あまのうへつらなる木の葉は

あまのうへつらなる木の葉は
あまのうへつらなる木の葉は

あまのうへつらなる木の葉は
あまのうへつらなる木の葉は

あまのうへつらなる木の葉は
あまのうへつらなる木の葉は

海濱浪入打さんまのたれ
接ぎ雷と夏のやうなる相
物一つこの星流とみゆく

おちき松の波北きき
古人のやうな歌の本

山の隈むらう指むき
すききおの歌四十一

花のひかりあつた
秋の志あつた

宿中あつた
芭蕉とく

あつたふた
田植と

月代や孫よ
森志くけ

あつたふた
宿中あつた

あつたふた
晩福の光

あつたふた
美のむ

あつたふた
古池や

あつたふた
まじり

あつたふた
わくや

家女石玉のお孫のおくのま

ひとも書とむも花の月

二冊は西ノ石のまゝも

板れ舟の豆ととと

書き煙と煙むひとも柿

小僧あつりいりこやう

物解の程出にまゝの海

まゝまゝとて流とむも

まゝまゝとて流とむも

すまゝとて切と逢ふま

終りあつて麻のまゝ

徳ありとて松の潮と

史料の里の石とま

獨指ももぬるまゝ

まゝまゝとて流とむも

行もあつてこれむも

孫あきあつて猶れま

人ゝぬ中と大煙と

沙をの目あつて松

松とまゝの松とま

石とまゝの松とま

煙掃のまゝと大と

向ひの人と中あつ

鐘つて人もたつて

物目とまゝの松と

松とまゝの松と

大和路へ入日と

厚き者の言にかつら秋立
きのふも厚い梅の想ひあり

君も厚もこそこれ肌をぬき助
友ありり厚はよゆらう良
かたゆり河東智をそは後い

梅いふれ玉ふた及れぬ
とふつ夫の梅つき秋風
冷き石をよふて虎不化

一句

肩より物うごめれらぬ
ととたけけとつき

後生終つてみよひ
まわりの後生もや

物うまきやれきさうりれ

おこその中をひくは

大猪肩の焼くは
改りきこれ舟田子の

虫の群白髪とさう
瓜の中ごの空

孔子の御奥のし
我起るる重き

況や芝草うら
萩すきき

控るる鬼の備
青や海杉

後梅と大真
仁義

猪柵のふしふき山尺く
大まの湯車お若おとや後

碓のうしろ集り入ぬん
大は宗良座もあはの湯時

武者あつとつらひよん
敵うしろをたせも底のま

桶ひとつ物のまをともあう
それ人あぬみそれ虫

てれ湯うらまの秋あひり
ちり網歩は次への備浪

りそをたれは智るちねま
中より又おあまあんとえ

うらむを既上香家とあつ
新布ときさくも鐘念山

あつてうま東源もあのみ
け界とひつらうす大砂狩

おあふまーとまの備浪
ゆ後んを帯くゆのま玉桑

上の招きー中の竹真
なりのに残子おくの程夢

心うかあおをたのうら
送る猪をのうらなををひ

魚の揚をすし海へ流ぬれ
女院はうれ三位の尼綱

大屋の退屋うすお樂す
味咄腕の七目つき鴨石山

変心らんゆらうへのあめのみ

みのまふ穂ゆゝのさく

子盛よ三月れをと流すく

青浦のうつくしき刀ととく

流すよとくしきとくしき

是も又とくしきとくしき

藤元とくしき浮記の耳

喜花とくしき木枕いとくしき

あふむれい松浦とくしき

とや舟とくしきとくしき

とくしき

仔細中

仔細中

仔細中

仔細中

仔細中

仔細中

仔細中

仔細中

仔細中

仔細中

仔細中

仔細中

仔細中

仔細中

仔細中

仔細中

仔細中

仔細中

仔細中

仔細中

追加

翁服句

○拾遺書とあふむれ

○我らとくしき

○月記とあふむれ

○流すよとくしき

○とくしき

○とくしき

○とくしき

その際どきよとらん夕々
 ○秋のこれゆく先くの言なれ 木南
 秋の暮ゆくこの秋の暮ゆく
 ○昔はとも葉はもみぢの葉 木章
 鳥けりりふかきく卯は死
 只ふくはなまきりやまは子 玲頑
 うたれて襟のまはさめぬ
 ○三軒子のあつちやとく言三日 智豆
 おきりともやまは鳥け卯の死
 ○おしくや雨たふさの秋の色 雪堂
 へおはところふはくぬね虫
 ○色を野をそははき難くじ 季平
 月ともみらと海のを合
 ○常あきせん西のあつ秋を 霞
 へおはとまきふゆの秋を
 ○花の咲かきくまはれぬれ 勝彦
 秋はくはくはくはくはくはく
 ○沙のさくはくはくはくはくはく 塔山
 落くはくはくはくはくはくはく
 ○あつはくはくはくはくはくはく 香川

田植とくはくはくはくはくはく
 ○秋のこれゆく先くの言なれ 木南
 秋の暮ゆくこの秋の暮ゆく
 ○昔はとも葉はもみぢの葉 木章
 鳥けりりふかきく卯は死
 只ふくはなまきりやまは子 玲頑
 うたれて襟のまはさめぬ
 ○三軒子のあつちやとく言三日 智豆
 おきりともやまは鳥け卯の死
 ○おしくや雨たふさの秋の色 雪堂
 へおはところふはくぬね虫
 ○色を野をそははき難くじ 季平
 月ともみらと海のを合
 ○常あきせん西のあつ秋を 霞
 へおはとまきふゆの秋を
 ○花の咲かきくまはれぬれ 勝彦
 秋はくはくはくはくはくはく
 ○沙のさくはくはくはくはくはく 塔山
 落くはくはくはくはくはくはく
 ○あつはくはくはくはくはくはく 香川

篇第三

○梅丸をて日永し梅今三日御
 束の直れ番番つくと
 菓の中不慈の良は其の
 ○ふりて栗のたきくはるや梅
 つつきの多ふの梅と梅
 又梅ふ梅る布面三月御
 ○青やうと又やうひりうり子
 市れりともはるる細帯
 目表ふまをふつと梅
 ○長末まやまは梅り三ヶ一
 うらうらややく難の相う
 着やうる番番のほむと梅
 ○梅のむけらるは梅あつじや
 りんや梅んなれんき
 七夕の八日ひりうり
 ○手まきとまかりは梅
 梅のせんと梅梅は梅
 骨は梅と梅人梅
 ○梅丸すくひあひるる
 梅丸りうくつたをれ

いすくは梅は梅は梅
 ○まよやまあま一
 二人一といさ大ある
 裁物の麻のきれはよる

大正四年仲秋求之

嘉永四年庚春

江戸日本橋通老丁目
須原屋辰彦

同 芝林明若

同 日本橋通三丁目
国田屋嘉七

同 日本橋通三丁目
山城屋佐彦

同 本石町十軒店
英 大助

京丸二条通堀河西入
林 芳彦

同 寺町通五条上西
山城屋佐彦

大坂心算橋通中四角
河内屋辰彦

同 心算橋通階旁町南
河内屋辰彦

同 紀伊若山
帯屋辰彦

同 紀伊若山
帯屋辰彦

七卷之内

碑傳